

令和 6 年 5 月 30 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00647

研究課題名（和文）主観的事態把握から対人関係的機能の発達の多様性に関する多言語研究

研究課題名（英文）A Research on the Diversity and Development of Subjective Construal to Interpersonal Functions: A Multilingual Viewpoint

研究代表者

早瀬 尚子（HAYASE, Naokko）

大阪大学・大学院人文学研究科（言語文化学専攻）・教授

研究者番号：00263179

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：懸垂分詞は発話の現場に密着した表現のため、発話者の立ち位置を必然的に含むことから、談話標識化という語用論的な機能を担う変化を見せる。本研究では、懸垂分詞の変化事例の検討を通じ、その意味変化の方向性を検討した。まず第一に、過去分詞由来の懸垂分詞はいずれも譲歩解釈を経由して談話標識化へ至る変化を見せていること、第二に、懸垂分詞が文頭か文末かのいずれで用いられるかという位置によって、対人関係上の意味が異なってくること、第三に、移動を表す懸垂分詞がメタファー的に転用されて、話題の時間管理の表現から話題そのものの変遷を示すものへと変化することを見た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

懸垂分詞は慣用的分詞構文として英語教育でもなじみがあるものだが、その主観化や談話標識化が見せる意味変化が個別バラバラに起こるのではなく、一貫性があるパターンが見られることが明らかになった。この現象は主観的・談話関連表現への語彙化現象ともいえるが、理論的な貢献として、認知言語学を発端とする構文化理論の中で捉えなおし位置づけられることを示したことになる。また、その機能が文頭か文末かという位置により異なるということから、語順の違いを積極的に構文として捉えることで、下位構文の知識の充実の必要性が再認識できることとなった。この知見は言語教育にも応用貢献できると考えられる。

研究成果の概要（英文）：Dangling participles, which is closely tied to the context of utterance, inherently include the speaker's standpoint and thus exhibit a shift towards serving as discourse markers. This study examines examples of changes in dangling participles to investigate the direction of their semantic change. First, it was found that dangling participles derived from past participles invariably show a change towards becoming discourse markers through a concessive interpretation. Second, depending on whether the dangling participle is used at the beginning or the end of a sentence, it conveys different interpersonal meanings. Third, we observed that dangling participles expressing movement are metaphorically repurposed, evolving from expressions managing the timeline of a topic to indicating transitions within the topic itself.

研究分野：認知言語学

キーワード：主観性 事態把握 懸垂分詞 対人関係機能 談話標識

1. 研究開始当初の背景

英語の懸垂分詞構文に関する筆者のこれまでの調査研究により明らかになったこととして、(1)本構文が発話者による発話現場的即時性と強く結びつく表現であること、(2)それゆえにその構文で用いられる懸垂分詞は発話者の主観性を色濃く表すという特徴がみられる、ことが挙げられる。この懸垂分詞が見せる意味変化のパターンに何らかの方向性や傾向が見られるかを検証することが次の課題であった。また、英語以外の言語でも似た現象が見られるかを検証することも課題であった。

Langacker は個別の構文と主体性・主観性との関わりを述べている一方で Traugott(2003)などの研究では接続詞、談話標識などの語に関する詳細な事例研究からの一般化がみられる。ただし、二つの事態を結ぶ複文的な関係において、片方の要素がもう片方の要素とどのような関係性をもつようになるか、という点についてはまだ研究がなされていなかった。このような環境において、主体性・主観性を担う要素がどのような意味変化をもたらすのか、については検討の余地があると考えられた。

2. 研究の目的

懸垂分詞構文は発話の現場に密着した構文であり、ここから、懸垂分詞節を用いた際に、発話者の立場という要素を必然的に含むものとなる。これにより、談話標識化という、語用論的な機能を担うようになるケースがあることがわかっていた。また懸垂分詞構文のように、二つの事態をまとめる複文に準じる形式の場合にこのような現象がみられることも観察されていた。二つの事態を結び表現する際に、「発見のシナリオ」に見られるような、発話者が事態描写に深く関与する捉え方が、日本語や英語を出発点にして言語でどこまで許容されていくのかを考慮していくことで、捉え方の類型論を追究できるのではないかという展望がある。

上記の研究実績を背景として、本研究課題では、具体的な懸垂分詞表現の事例研究をさらに積み重ねてまとめていくことを第1の目標とした。それにより、第2の目標として、総合的に見てこの表現がとりやすい意味変化の方向性を導き出すことを目指した。第3に、まず手始めに日英比較において、意味変化や談話標識化の方向性について差異がみられるかどうかを検討し、見られるとしたらそれが何に起因する現象とみなされるのかを考察することとした。

3. 研究の方法

COCA や COHA といった大規模コーパスデータに基づき、懸垂分詞の用例を検索して、談話使用例を詳細に検討し、それぞれの懸垂分詞のケーススタディを積み重ねていくことを目標とする。さらに、「構文化」理論を用いてそれらのケーススタディを総合的に俯瞰して検討することを試みる。

4. 研究成果

通時的データと共時的データを中心として(1)given (that)... を、また共時的データを中心として(2) assuming...および(3)物理的移動を表すタイプの懸垂分詞について、それぞれ検討した。

(1) given <早瀬(2020a),(2020b)>: この懸垂分詞の用例についての COHA コーパスに基づく調査により、通時的な意味変遷を明らかにした。結論としては、譲歩系の解釈を途中で経て発展していることを明らかにした。さらに、この譲歩解釈を介して、話題転換機能(話の流れがそれまでとは異なる方向へ向かうことの予告)をもつように変化する、という変化の傾向が見られることがわかった。この譲歩から話題転換機能へという意味変遷の傾向は、これまでに調査してきた他の過去分詞由来の懸垂分詞(例: Granted など)の変化の方向性と一致している。ここから、過去分詞由来の懸垂分詞の一般的な意味変遷の傾向をスキーマとして取り出すことができる。

また Given はそもそもその文字通りの語彙的な意味として、後に展開する主節内容に対しての所与の前提条件を述べるというものであった。通時的変遷の調査を行った結果、そこから次第にその語彙的な意味合いが薄れているケースの割合が増加し、given that 全体で話題転換機能を担うチャンク表現が確立していることが確認され、これを構文化現象として位置付けた。

(2)assuming <早瀬(2021b)>: これまでの懸垂分詞の研究では前置型を主に扱ってきたが、文内での位置によってもその機能が変わる可能性が考えられるので、後置型も検討する必要があった。その手始めとして、assuming 節を扱った。

assuming 節を前置した場合には if 節と同じく仮定関係の前件という論理的な意味関係を表すが、後置した場合はそれとは異なり、意味の射程としては論理性からは離れた追想や、成立前提条件の提示による但し書きのような、単純な「仮定関係」以上の意図を表す事例に大きく偏っていることがコーパス調査から明らかになった。

さらに後置型の assuming から派生した例と思われるが、Assuming 単独で用いることで話者

の「たぶん・きっとそうではないか」という強めの想定というモダリティを帯びる事例があることを明らかにした。このことから、後置型の assuming 節は主に「相手の認識を先取りし、それに配慮を見せる」「自分の議論や主張の穴を先取りして修正、補足説明を与える」などという対人的、間主観的要素がみられることがわかった。

この間主観的な意味が、該当表現が後置されたことで得られていることを示し、懸垂分詞でも前置型と後置型とで異なる構文的意味をもつ、とする仮説を提示した。ここから示唆される理論的意義として、構文理論の中で語順の違いという側面も積極的に捉えていくことが必要であると主張することになる。

(3)移動の懸垂分詞<早瀬(2021a),(2022b)>: 移動に基づく懸垂分詞(Coming, Going, Turning など)について共時的な用例の調査を行った。移動動詞を用いた懸垂分詞構文の多くは、時間管理の表現を経て談話上の話題の変遷を示すものへとメタファー的に転用されて用いられることが多いことを示し、またそれらが使用される領域によって意味的な偏りを見せることについて、Lakoff and Johnson(1980)や Lakoff(1987)の身体論的な観点から説明を試みた。

時間メタファーと関わって談話指示的な役割を果たすようになること、また実際の移動として用いられる事例では進行方向に向けた表現しか見当たらない一方で、談話的用例にメタファー転用された事例になればなるほど時間を遡る方向の表現が見られやすくなることを明らかにした。

(4)構文理論で想定されるネットワークやスキーマの在り方については、下位レベル構文の重要性が指摘され、そちらが近年重視される流れにあるが、一方で上位レベル構文にもその役割と存在意義があり、とりわけ新奇表現が生まれてくる際にその力を発揮するというふうに役割分担がなされていると考えられる。この上位レベルスキーマの役割の可能性について、認知言語学会のワークショップにて発表を行った<早瀬(2022c)>。

(5)インタラクションにおける懸垂分詞の可能性: 懸垂分詞由来の表現の間主観的かつ談話標識的な使い方について、カウンセリングにおけるインタラクションを中心としたデータを基に、検討を進めている。現時点ではまだ論文の準備中だが、カウンセリングに認知言語学を応用して考える可能性について検討(早瀬(2022a))したことから、策動的とよばれる相手の思考の流れを指示してある方向性に導くような状況がカウンセリングで見られることに着目して検討中である。特に相手を積極的に誘導するときには前置型の懸垂分詞由来表現を、また相手に対して補足的な情報を提示して理解を促進したいときには後置型の懸垂分詞由来表現を用いる傾向がみられている。これは本研究(3)で検討した談話標識使用の前置型と後置型で意味が分化しているという結論と平行するものと考えられる。

これにより、構文化には語順に基づく違いを考慮すべきこと、またその構文化パターンの違いは、インタラクションに着目する語用論的な研究へ応用できる可能性をもつものと位置づけられる。

今後の計画として、英語だけでなく日本語でのカウンセリングデータなどのインタラクションでの共通性および相違点について、比較検討をすることを考えたい。そして、文や物語レベルといった文語的ジャンルだけではなく、対話を通じたインタラクションという会話ジャンルの中でも同じように、状況場面に応じた語順や形式の役割が異なってくるのではないかと、そのように言語表現形式がすみ分けをしているのではないかと、ということをも明らかにしたい

<参考文献>

- 早瀬尚子(2020a)「過去分詞由来の懸垂分詞が見せる変遷: 構文化の観点から」『ことばから心へ: 吉村公宏先生退職記念論文集』開拓社、pp. 317-330.
- 早瀬尚子(2020b)「過去分詞 given に見る談話的用法への変遷について」田中廣明・秦かおり・吉田悦子・山口征孝(編)『動詞の語用論の構築へ向けて』第2巻 開拓社 pp. 2-24.
- 早瀬尚子(2021a)「移動タイプの懸垂分詞構文とその動機づけ」『認知言語学の最前線 山梨正明教授古稀記念論文集』ひつじ書房 pp. 199-214.
- 早瀬尚子(2021b)「後置型懸垂分詞構文について—assuming 節と(間)主観性」天野みどり・早瀬尚子(編著)『構文と主観性』くろしお出版 pp. 139-162.
- 早瀬尚子(2022a)「カウンセリングのことばに見る認知言語学の世界観」菅井三実・八木橋宏勇(編著)『認知言語学の未来に向けて—辻幸夫教授退職記念論文集—』開拓社 pp. 169-179.
- 早瀬尚子(2022b)「移動タイプの懸垂分詞構文とその動機づけ—メタファー転用にまつわる考察—」『時制・アスペクト・モダリティ・視点と状況把握・状況報告』筑波科研論文集 pp. 199-214.【査読あり】
- Hayase, Naoko (2022c) "Reconsidering the significance of lower- and higher-level constructional schemas" *JCLA Proceedings 22* (認知言語学会発表論文集) pp. 398-403.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 早瀬尚子	4. 巻
2. 論文標題 「移動タイプの懸垂分詞構文とその動機づけ」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『認知言語学の最前線 山梨正明教授古稀記念論文集』児玉一宏・小山哲春（編）ひつじ書房	6. 最初と最後の頁 199-214
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 早瀬尚子	4. 巻
2. 論文標題 「XYZ構文の拡張から見る構文スキーマの位置づけについて」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『認知・機能言語学研究』大阪大学言語文化共同研究プロジェクト	6. 最初と最後の頁 51-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/84983	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 早瀬尚子	4. 巻
2. 論文標題 「移動タイプの懸垂分詞構文とその動機づけ—メタファー転用にまつわる考察」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『時制・アスペクト・モダリティ・視点と状況把握・状況報告』筑波科研論文集	6. 最初と最後の頁 199-214
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 早瀬尚子	4. 巻 21
2. 論文標題 「浅尾・宮下・横森講師へのコメント：使用基盤的構文文法の観点から」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 JCLA Proceedings	6. 最初と最後の頁 433-435
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 早瀬尚子	4. 巻 -
2. 論文標題 後置型懸垂分詞構文について—assuming節と(間)主観性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『構文と主観性』天野みどり・早瀬尚子(編)くろしお出版	6. 最初と最後の頁 139-162
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 早瀬尚子	4. 巻 V
2. 論文標題 「「とき」の周辺的な使用について—話題化への途上」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『言語文化共同研究プロジェクト2019 認知・機能言語学研究V』	6. 最初と最後の頁 51-60
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) 10.18910/76980	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 早瀬尚子	4. 巻 2
2. 論文標題 「Given の意味変遷について」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 田中廣明・秦かおり・吉田悦子・山口征孝(編)『動的語用論の構築へ向けて』開拓社	6. 最初と最後の頁 2-24
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 早瀬尚子	4. 巻
2. 論文標題 「過去分詞由来の懸垂分詞が見せる変遷：構文化の観点から」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『ことばから心へ：吉村公宏先生退職記念論文集』浅井良策・山本修・米倉よう子(編)開拓社	6. 最初と最後の頁 317-330
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 早瀬尚子	4. 巻
2. 論文標題 「カウンセリングのことばに見る認知言語学的世界観」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『認知言語学の未来に向けて』菅井三実・八木橋宏勇（編）開拓社	6. 最初と最後の頁 170-181
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 HAYASE Naoko	4. 巻 22
2. 論文標題 "Reconsidering the significance of lower- and higher-level constructional schemas"	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 JCLA Proceedings（認知言語学会発表論文集）	6. 最初と最後の頁 398-403
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 早瀬尚子	4. 巻
2. 論文標題 「カウンセリングのことば」	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 『シリーズ 1. ことばの認知科学』辻幸夫・菅井三実・佐治伸郎（編）朝倉書店	6. 最初と最後の頁 161-181
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 早瀬尚子
2. 発表標題 「言語学的要素からインタラクション分析への橋渡し 意味論・語用論的概念を応用して」
3. 学会等名 日本英文学会関西支部 シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Naoko HAYASE
2. 発表標題 Constrctionalization of subordinates into discursive use: the case of past participle-related phrases
3. 学会等名 11th International Conference of Construction Grammar (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Naoko HAYASE
2. 発表標題 Reconsidering the significance of lower- and higher-level constructional schemas
3. 学会等名 日本認知言語学会ワークショップ (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 早瀬尚子
2. 発表標題 「構文文法の基本的な考え方について問い直す：発表者三氏へのコメント」
3. 学会等名 日本認知言語学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 早瀬尚子
2. 発表標題 「Assumingの後置用法について」
3. 学会等名 第18回洛中ことば倶楽部 (於 中之島センター：2019年3月4日)
4. 発表年 2019年～2020年

1. 発表者名 HAYASE, Naoko
2. 発表標題 “On the Pattern of Semantic Change in Dangling Participle Phrases into (Inter)subjective Function”
3. 学会等名 The 16th International Pragmatic Conference (Hong Kong Polytechnic University, Hong Kong: 2019年6月11日) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 早瀬尚子
2. 発表標題 「仮定を表す懸垂分詞からの意味分化」
3. 学会等名 藤女子大学公開講演会 (於 藤女子大学: 2019年 9月 6日) (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 早瀬尚子
2. 発表標題 「懸垂分詞から慣用的語用論標識へー移動タイプの懸垂分詞」
3. 学会等名 筑波大学 言語学講演会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 坪井 栄次郎、早瀬 尚子、加賀 信広、西岡 宣明、野村 益寛、岡崎 正男、岡田 禎之	4. 発行年 2020年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 296
3. 書名 認知文法と構文文法	

1. 著者名 早瀬 尚子、吉村 あき子、谷口 一美、小松原 哲太、井上 逸兵、多々良 直弘	4. 発行年 2018年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 348
3. 書名 言語の認知とコミュニケーション	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------